

# トルコ語と現代ウイグル語のレキシコンの構造に関する音韻論的研究

菅沼, 健太郎

<http://hdl.handle.net/2324/1560373>

---

出版情報 : Kyushu University, 2015, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名	菅沼 健太郎			
論 文 名	トルコ語と現代ウイグル語のレキシコンの構造に関する音韻論的研究			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	久保 智之
	副 査	九州大学	教授	上山 あゆみ
	副 査	九州大学	准教授	下地 理則
	副 査	九州大学	教授	高山 倫明
	副 査	東京大学	教授	林 徹

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、トルコ語と現代ウイグル語という、共にチュルク諸語に属する 2 言語を対象として、レキシコンの構造を、音韻論的に（音の面から）研究したものである。

レキシコンとは、ヒトの頭の中に貯蔵されている語彙のことを言う。従来の研究によれば、日本語話者のレキシコンには、最低 3 つの語彙グループの区別があり、音韻論的にも、連濁のような様々な規則・制約が、適用されたり、されなかったりする。例えば、固有語という語彙グループは古来の日本語であるが、「さる～やま-ざる」のように、連濁規則が働く。この語彙グループには、最も多くの音韻論的な規則・制約が働く。もうひとつの語彙グループである漢語は、中国語から借用した単語であり、「しけん～司法-しけん」のように、連濁規則は働かない、などである。

本論文全体では、従来の日本語に関する研究で仮定されてきた、下の図 1 のようなレキシコンの構造が、ヒトの言語にあり得る構造のひとつにすぎないことを示した。以下、章を追って構成を述べる。従来の研究やその問題点を呈示した第 1 章、第 2 章に続き、第 3 章では、トルコ語の音韻規則を詳細に議論したあと、トルコ語のレキシコンの構造が図 2 のようであることを示した。第 4 章では、現代ウイグル語の音韻規則を詳細に議論したあと、現代ウイグル語のレキシコンの構造が図 3 のようであることを示した（W、X、Y、Z は語彙グループを示す）。

図 1. 日本語

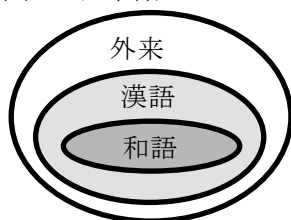


図 2. トルコ語

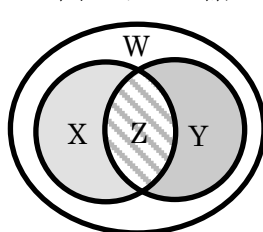
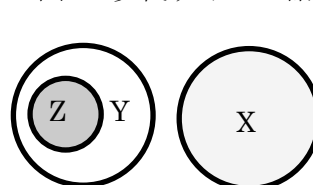


図 3. 現代ウイグル語



第 5 章では、トルコ語、現代ウイグル語、日本語、韓国語のレキシコンの構造を対照し、共通点を明らかにし、レキシコンの普遍的な特徴に関する仮説として次の a, b を提案した。

- レキシコンには、「最も多くの規則が適用される語彙グループ」が 1 つだけ存在する。
- レキシコンは、語彙の集合間のどこかに包含関係がみられる構造をもつ。

以上のように、本論文は、トルコ語と現代ウイグル語を音韻論的に精緻に分析した上で、各言語

のレキシコンの構造を明らかにし、それらを日本語などの言語と対照し、ヒトの言語にあり得るレキシコンの構造を仮定した。これは、今後のレキシコン研究一般に対して、大きな貢献をなす業績であると言える。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分であることを認める。